

# 現場指示用法におけるコ・ソ・アについて

－ その意味素性と機能領域の特徴などを中心にして－

金原 鑑\*

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 現場指示のコ・ソ・アに対する先行研究の検討
  3. 現場指示のコ・ソ・アによる指示形式の分類及び機能領域の特徴
    - 3.1 現場指示のコ・ソ・アによる指示形式の分類
    - 3.2 各指示形式の内容分析
      - 3.2.1 「自立型」
      - 3.2.2 「依存型」
        - 3.2.2.1 「融合型」
        - 3.2.2.2 「対立型」
  4. おわりに
- 
- 

## 1. はじめに

日本語の指示詞コ・ソ・アの指示用法は「現場指示用法」と「文脈指示用法」に大きく分けられる。本稿では、そのうち「現場指示（用法）」（眼前の対象を直接指し示す用法。「直示（deixis)用法」<sup>1)</sup>とも言う。）における指示詞コ・ソ・アの基本的な意味素性及び機能領域

---

\* 韓国外語大専科 講師 日本語学

1) 以下、種々の学者による「直示の定義」について簡単に触れておく。

金水 (1999) は、「直示とは、談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むことである。」(p.68) 、と「直示」についての定義を与えている。

John Lyons (1977) では、

「By deixis is meant the location and identification of persons, objects, events, processes and activities being talked about, or referred to, in relation to the spatiotemporal context created and sustained by the act of utterance and the participation in it, typically, of a single speaker and at least one addressee.」(p.637) のように定義された。

(「ダイクシスとは、話題にされたり、言及されたりしている人物、物、出来事、過程、活動の位置づけおよび同一性の確認を意味する。これは、発話行為とそこへの参加（典型的には、ただ一人の話者と少なくとも一人の受け手）によって作られ維持される、時間的・空間的なコンテキストと関係を持つ。）」

の特徴について考察する。またこの考察を通じて、現場指示の各「指示の場」の形式（以下、「指示形式」と呼ぶ）でのコ・ソ・アの選擇要因についても考えてみる。

そのために、現場指示のコ・ソ・アに対する先行研究を検討した上で、その指示形式の分類及び内容分析を行うことにする。その際、空間的及び心理的視点と遠近概念とを理論的基盤として援用することにしたい。（以下に用いられる「對立型」と「融合型」という用語は正保（1981）参照。）

## 2. 現場指示のコ・ソ・アに対する先行研究の検討

現場指示のコ・ソ・アについて、古くからの「近称・中称・遠称」説（距離区分説とも言う）では、話し手から対象までの距離の違いによって、コ、ソ、アを捉えたのに對し、佐久間（1951）は、コは話し手の領域、ソは聞き手の領域、アはその外の領域を指すという「なわばり」説（人称区分説とも言う）を提唱した。が、佐久間のような把握では、コは話し手、ソは聞き手というように固定させている点に問題がある。

佐久間仮説以降、三上（1970）では「コレ」「アレ」はともにdeictic（直接指示）であるのに對し、「ソレ」系列だけはdeicticのほかにはanaphoric（文脈承前）にもなると述べ、さらに「アレ」は話し手・相手共通の（空間的・時間的）遠方の事物のみを指すという見解を提示している。この三上の見解によって、少なくとも「アレ」については単一の意義要素が示唆されたものと読み取れる。

阪田（1971）は佐久間説の矛盾を解消するものとして、話し手と相手という對立の場に基づかず、話し手の立場を中心にした、いわば絶對的な領域がコ・ソ・アを規定するという解釋を試みた。

高橋・鈴木（1982）は、大槻（1890）に代表されるいわゆる「近称・中称・遠称」説、佐久間の説、阪田の説などを修正して、話し手と聞き手が（1）對立する場合（2）融合する場合とわけて、その代案を提示した。

つまり、（1）のコ・ソ・アの指示体系は、話し手と聞き手の對立の中で対象を自称・對称というルールで捉え、また一方で、聞き手との關係なしに対象との距離によって近称・中称・遠称というルールでとらえる、二元論的なとらえ方が共存しているが、（2）の場合は、話し手と聞き手（即ち「われわれ」）から対象までの距離の遠近によって、近称・中称・遠称というルールのみでコ・ソ・アをとらえている、ということである。

吉本（1992）では、現場指示とは指示物の同定が外界または出來事記憶にもとづいて行

われる場合であると定義づけた上で、各個人に属するものとして他者に認識されている領域の「個人空間」、及び、会話の参加者を取り巻く領域でその個人空間をも含む「会話空間」という概念を導入し、それに基づいて、現場指示のコ・ソ・アの使い分けのことを説明した。が、吉本自らの指摘もあるが、例えば、他人に抱かれている子を母親が「この子」と指示できるとするところに、そのような概念の適用の限界が窺われるのではないかと考えられる。さらに、内言や獨り言においていわゆる中称のソが出現可能であるということについては、言及していないようである。

金水 (1999) は指示詞コ・ソ・アを直示用法と非直示用法との面において考察しているが、コ直示は、眼前の状況において指差しや眼差しによって焦点化された話し手の近傍の領域と関連づけられた要素を値とし、アの場合は、眼前の空間においてコと対立する形で、それらによって焦点化された話し手の（直接操作できない）遠方の領域と関連づけられた対象を値にする、と説いた。さらに、領域の性質や指定の仕方がコやアと違ったソの直示用法を、人称區分的な聞き手領域指示の用法と距離區分的な中距離指示の用法に二分した上で、獨り言ではそのような中距離のソは現れにくいとも指摘している。が、実はそのような中距離（または中称）のソが内言や獨り言でも出現可能であるということ、この研究では積極的に認定していないものと考えられる。

以上のような先行研究の検討の結果、明らかになった問題点は、次の点である。

- 1) 現場指示の「自立型」(3.2.1 参照) では、話し手の空間的・心理的距離によってコ・ソ・アの順にその各指示領域が出現するにもかかわらず、そのことについてはほとんど触れてない、または無視している。
- 2) 現場指示のコ・ソ・アに対しては聞き手の役割にそれほど意味を付与しない話し手中心の研究が主流をなしてきた。

以下ではこのようなことを踏まえて、先行研究とは異なった観点から、現場指示のコ・ソ・アの基本的な意味素性及び機能領域の特徴などについて、種々の指示形式を通して究明してみる。その際、指示 (reference) と外延 (denotation) <sup>2)</sup> という概念もその理論的基盤とする。

2) 指示 (reference) と外延 (denotation) について言及しておく。

- ・ 指示 (reference) : 「われわれは言語記号の意味作用を利用して、現実の、パロールの場面にある具体的な物を指示する。言語記号と言語外の対象との、このような結びつきを「指示 (あるいは指向)」といい、この場合、言語記号は指示の意味 (referential meaning) をもつといわれる。」(『言語学大辞典 術語編』(1996) 、 p.630~631)
- ・ 外延 (denotation) : 「一つの概念によって包括される対象の範囲のこと。extensionともいう。内包 (CONNOTATION) に対する。例えば、「木」という概念の外延は、「木」という語によって指示される松・杉・櫻・梅などすべてである。外延が小さくなれば、その包括する対象の範囲は小さくなるが、その範囲の対象に共通する性質 (=内包) は増加する。」(『現代言語学辞典』(1988) 、 pp.156~157)

### 3. 現場指示のコ・ソ・アによる指示形式の 分類及び機能領域の特徴

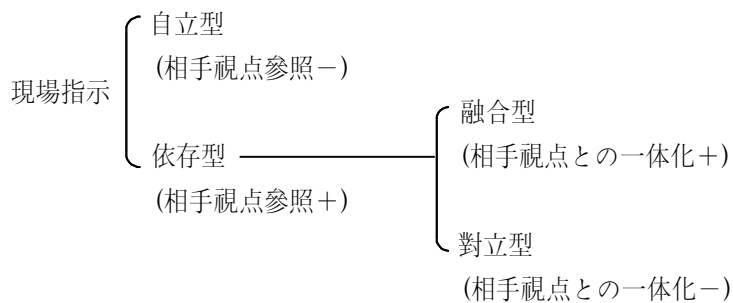
ここでは現場指示のコ・ソ・アによる指示形式の分類とその内容の分析を通して、コ・ソ・アの基本的な意味素性及び機能領域の特徴を明らかにしてみる。

#### 3.1 現場指示のコ・ソ・アによる指示形式の分類

「現場指示」とは、基本的には、対話や講演などのように、話し手と聞き手が、同一の空間に共存する場において、多くのばあい、身ぶりや手ぶりや表情などの、表現行為を伴いつつ、話し手が、現に知覚していて、聞き手にも知覚されるはずだとする事物を、コ・ソ・アで指す用法をいう（堀口（1990）参照）。

このような現場指示については、従来、指示対象をめぐる話し手と聞き手との関係において、話し手の側の視点による指示対象の捉え方に重点が置かれた研究となっていたようである。

このような従来の研究の流れに沿いつつも、ここでは現場指示のコ・ソ・アに対する指示形式を、まず（話し手による）聞き手視点の参照様式の有無によって、それなしの「自立型」（聞き手が仮にいてもいないのを見なす場合も含む）とそれのある「依存型」にわけ、さらに「依存型」を聞き手の視点の捉え方によって、その視点を同一化・一体化する「融合型」とそれを積極的に参照する「対立型」に下位区分する。（広い意味での現場指示は知覚指示と呼ばれることもあるが、ここでは視覚に頼る狭い意味での現場指示を研究対象としている。また以下の各指示形式に対する図は、小泉（1990）の図を参照して示す。）このようなことを図にまとめると、次の通りとなる。



[図1] <現場指示における各指示形式図>

## 3.2 各指示形式の内容分析

ここでは(3.1)で分類した各指示形式の内容分析を通じて、コ・ソ・アの意味素性及び機能領域の特徴について究明してみることにする。

### 3.2.1 「自立型」

話し手自身が場面から自立して、つまり聞き手の視点とは関係なく(聞き手のない場合)あるいはその視点を参照しなくて(聞き手があっても、聞き手めあての發話ではない場合)指示の場を作り上げる際の、その指示形式を「自立型」と呼ぶ。

この場合においては、話し手自らの事物を指すことが自由にでき、コ・ソ・アともに揃って出現可能である<sup>3)</sup>。さらに、話し手自身が近いと認識したものにはコ、遠いと認識したものにはア、近くも遠くもないと認識したものにはソが用いられるという特徴が見られる。

このような「自立型」に属するコ・アの例をいくつか取り上げてみよう。

- (1) 要は寝ころびながら今更のようにそれらの柱の光澤を見、八重山吹の花が垂れている床の間の春日卓を見、闕の向うに、戸外のあかりを水のように映している縁側の板を見た。妻がこのごろのあわたしきの中にありながらなおときどきは四季の風情を座敷に添える心づかいを忘れないのは、いくらか情勢で繰り返しているのだとしても、やがてこの部屋にあの花までがなくなってしまう日を想うと、名ばかりの夫婦と云うものにも、朝夕眼に沁みる柱の色と同じようななつかしさがある。……(『蓼喰う虫』)
- (2) 太田夫人のために稻村令嬢がまた点前をした。一座の目はその方に注がれたが、この令嬢はおそらく黒織部の茶碗の因縁も知らないのだろう。習った型通りに所作をしている。癖がなく素直な点前である。姿勢の正しい胸から膝に氣品が見える。(『千羽鶴』)
- (3) 學生は門をくぐった。彼は勅使門の外側をめぐり、山門の前の蓮池のほとりにたたずんだ。さらに池に跨る唐風の石橋の上に立って、聳えたつ山門を仰いだ。『彼の放火の目的はあの山門だな』と私は思った。(『金閣寺』)

3) 中称のソについては、以下のような記述および例を参考にされたい。  
西出(1993)では、実験を通して、この「自立型」に相当する指示形式である「個人型」は、(話し手の)身体を中心に「コレ・ソレ・アレ」の順に取り囲む同心卵型に指示領域が分節され、それぞれが距離により「近い」、「中位」、「遠い」ものを指示する、ということを明らかにしている。  
・(急いで、家を出ようとするときに)「これと、それと、あ、あれももっていかなくちや」(作例)

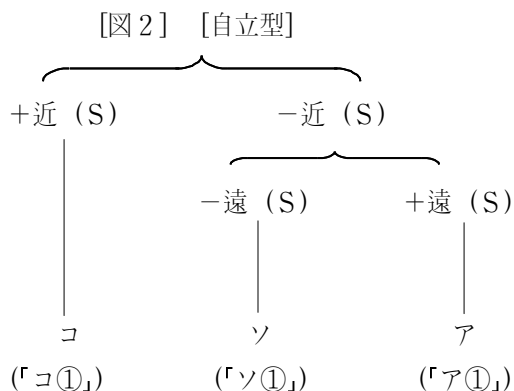
例(2)、(3)に見られるように、話し手は現場にある知覚できる具体的な対象に対して、自分にとって空間的または心理的に近いものと認識した場合には近称のコ（以下、「コ①」と呼ぶ）を、遠いものと認識した場合には遠称のア（以下、「ア①」と呼ぶ）を用いることができる。さらに、その具体的な指示対象を自分にとって近くも遠くもないものと認識した場合には、中称のソ（以下、「ソ①」と呼ぶ。中称のソは「中立・中位・緩衝領域（指示）」のソと命名する）を用いられる（西出（1993）参照）。

さて、このような認識のし方とは異なって、例（1）の場合には「指示範囲」（注：指示詞が指示できる対象の大きさのことで、被指示物自体に相当するものをいう。また、見かけの大きさとも言い換えられる。吉田（1993）参照）という概念による認識が行われていると考えられる。

つまり例(1)のように、その指示範囲の最大である場合はコしか用いられないし、アは具体的あるいは個体的なもので、その指示範囲の小さいものを指示する場合に使われるようである。すなわち、その指示範囲（指示対象）の大きさによって、コとアが使い分けられることがありうるのである。

さらに、例（1）ではコとアで指される指示対象の間に、全体と部分あるいは漠然としたまとまりと個別的な何かといった関係が成り立っているとも考えられる。換言すれば、このような関係は指示範囲の大小を別の視点から見たものともいえる。

以上のように、「自立型」では話し手の空間的・心理的距離によって、コ・ソ・アが使い分けられており、その使い分けには指示対象の大きさもある程度関与しているようである。以下、「自立型」におけるコ・ソ・アの選択要因（「指示範囲」はそれらを選ぶ際の付随的な概念と考えられるので除くことにする）及びその機能領域の特徴に基づいて、コ・ソ・アの意味素性を図示すると、次のようになるであろう（「S」は「Speaker」の略で、「話し手」を意味する）。



この [図2] の [自立型] では、現場の知覚対象に対して、話し手が自分にとって空間的または心理的に近いものと判断した場合（ [+近 (S)] ）には近称のコ（「コ①」）が、遠いものと判断した場合（ [+遠 (S)] ）には遠称のア（「ア①」）が、そして、近くも遠くもないものと判断した場合（ [-近∩-遠 (S)] ）には中称のソ（「ソ①」）が用いられる。

### 3.2.2 「依存型」

話し手自らが聞き手の視点を参照して指示の場を作り上げる際の、その指示形式を「依存型」と呼ぶ。これは（話し手による）聞き手の視点の捉え方の相違によって、「融合型」と「対立型」に区分し得る。そして「自立型」と同じく、「コ・ソ・ア」全部が揃って現れるという面が見られる。

#### 3.2.2.1 「融合型」

話し手が現実の場面内の聞き手を心理的に自分に身近な存在として捉えて、聞き手を自分の領域内に引き入れて「場」を構成する時、つまり自分と相手と同じ立場に立つものと認識した際の指示形式を「融合型」と呼ぶ。換言すればこれは、指示対象に対して話し手と聞き手とが對等に関わっているが、聞き手の視点が話し手に融合・一体化される「意識の場」の一種なのである。

このような「融合型」に属するコ・ソ・アの例を以下に挙げて、その分析を試みる。まず、コの例について分析してみる。

- (4) 「これは何でしょう」と云って、仰向いた。  
 頭の上には大きな椎の木が日の目の漏らないほど厚い葉を茂らして、丸い形に、水際まで張り出していた。  
 「これは椎」と看護婦が云った。まるで子供に物を教える様であった。（『三四郎』）
- (5) 「允ちゃん、なにがい。なんでもすきなものをおっしやい。ねえさんの持っているもので……」  
 允子は、そういわれると、言下に、  
 「これがいい。」  
 といって、姉の指に輝いていたゆび輪を差した。  
 「あら、これは困るわ。」（『女の一生』上）
- (6) 「どうもありがとうございます。だれが転任するんですか」  
 「もう発表になるから話してもさしつかえないでしょう。實は古賀君です」

「古賀さんは、だってここの人じゃありませんか」

「ここの地の人ですが、少し都合があって——半分は当人の希望です」（『坊っちゃん』）

例(4)、(5)の「これ」はともに話し手と聞き手の目の前にあるものであり、例(6)の「ここ」は両者が現にいる場所である。ここでコが用いられているのは、（話し手が聞き手も自分と共通の認識を持つと想定して「われわれ」の場を構成した上で、）空間的にも心理的にも我々の近くにあると判断したものを指示するからである（但し、例(5)に比べて例(6)の場合は指示範囲が最大であるという特徴が窺えるようである<sup>4)</sup>）。つまりこのコは、指示対象に対して空間的に話し手と聞き手が對等に関わっているが、聞き手の視点が話し手に同一化・一体化されて話し手の視点のみが参照される場合に用いられる「融合型」のコ（以下、例(4)、(5)の場合は「コ②」、例(6)は「コ③」と呼ぶ）である。

このようなコについてさらに例(4)、(5)の二例を対象にして言い添えておくと、ここでは話し手が「仰向き・指す」という指示行為を伴って現場にある指示対象をコによって提示し、聞き手はその対象（それぞれ椎、ゆび輪）を知覚（ここでは視覚）によってすでに了解しているのでコによる同対象への照応を行うことができるということである。換言すれば、もし話し手が聞き手にとって未だ知覚的に了解されていない対象に対して指示行為を伴わずにコで提示するとしたら、「えっ、これって何？」と聞き返されるはずなので、この段階では聞き手のコによる同対象への照応は不成立となるのである。つまり、現場指示において「仰向き・指差し」などのようなジェスチャー（gesture）を伴わない指示詞による対象の提示が行われる場合、それに對する指示詞の照応が成立しないこともありうる（但し、話し手が（指示行為を伴わずに）指示詞のみで対象を提示したい場合には、その提示直後それに説明を加えなければならない。それによって聞き手は（指示詞による）同対象の照応ができるのである）。

これら例(4)、(5)のようなジェスチャーは伴わないまでも、例(6)でも融合型のコが用いられている。この例(6)のコは、話し手と聞き手によって談話が行われている現場内の対象を指示する例(4)、(5)のコとは異なって、抽象的ではあるがその現場外にまで指示空間が擴張された対象を指し示す。これは、言語外的な共通認識に基づいているのではないかと考えられる。

次に、ソの性格について詳しく分析してみよう。

---

4) 例(6)のコにも見られるように吉田(1993)では指示範囲が大きいときにコを用いるとすることによって、次のような例文のコを統一的に扱うことができるとした。

(1) 木星はコノ空のどこかに見えるはずだ。 (2) コノ天氣ではどこにも行けない。  
(3) コノ新鮮な空氣は都會にはない。 (4) コノ部屋は寒い。(pp.342~343)

中でも例(2~4)については、指示対象がどれも話者を包むような状態で周囲にある場合であるが、その指示範囲が最大であるからコ以外是用いられない、と説いた。



- (7) わたしの肩に手をかけて薬用葡萄酒の臭いを吐きかけながら浅井さんはよろめきました。  
 「家はどこ？ 送っていくよ」  
 「すぐそこなんです」  
 「行っていいかい。ぼく」  
 その晩、浅井さんはわたしの部屋に泊りました。（『海と毒薬』）
- (8) 種田は通過の道の両側を眺めている中、自動車は早くも秋葉神社の前に来た。すみ子は戸の引手を動しながら、  
 「ここでいいわ。はい。」と賃錢をわたし、「そこから曲りましょう。あっちは交番があるから。」（『墨東綺譚』）
- (9) 「お久や、わたしの蝙蝠を出して貰おう、大分蒸して来たようだが、この塩梅じゃあ又雨だな」  
 「そしたら、車でお行きやしたら？」  
 「なあに、じきそこだ、歩いたって譯あないさ」（『蓼喰う虫』）

例（7～9）の場合、「そこ」が指示しているのは話し手と聞き手のどちらにとっても近い場所であることは明らかである。つまりこれらの指す場所は、距離的には話し手と聞き手の双方から少し離れたところにあり、（心理的には）相手にとってまったく知らない場所である。それにもかかわらず、ソを用いるのは、空間的にも心理的にも聞き手に近いという理由によるのではなく、空間的にも心理的にも我々にとって近くも遠くもないということによるからであろう。この場合にはその対象をめぐる話し手のほうが優位を占めて聞き手の視点が参照されるものと考えられる。

そのような性格のソについて、聞き手の関与という側面から説明しようとする傾向（川端（1993）参照）もあったが、やはりこのようなソを聞き手領域の指示のソと同列に扱うことは難しいようである。

従って、例（7～9）でのソは、話し手が聞き手も自分と共通の認識を持つと想定して「われわれ」の場を構成した上で、空間的にも心理的にも我々の近くにあるとも遠くにあるともつかない曖昧だと判断したものを指示する時の、「融合型」のソ（「中称」のソといわれるが、以下では同意味での「中立・中位・緩衝の領域（指示）」のソということばも併用してみる。このようなソを「ソ②」と呼ぶ）であると見られる。

次に、アの性格について述べる。

- (10) 女は丘の上からその暗い木蔭を指した。  
 「①あの木を、知っていらして」という。  
 「②あれは椎」（『三四郎』）
- (11) 「掛合万歳だよまるで…まアまアしっかり歩けて…おウ、前の山を見ろよ、ええ？」

前の山を見ろてんだ」

「ああ、山か」

「①あれはおめえ、東海道名代の箱根山だ」

「ああ、②あれかい？ 箱根山てえのは、噂にや聞いてたがなあ、眼のあたり見たのははじめてだなあ、へII、やはり箱根山とくるとずいぶん厚みがあるなあ」

「厚みだつてやがら、よせやい、山は高さツてんだい」

「ああ、高さかい？ へええ……あッ、おいおい……」

「なん、なんだい」 「この山アおかしいじゃねえか」

「どうして……」 「だんだん高くなってくじゃねえか」

「つまんねえことに驚くな、この野郎は。あたりめえじゃねえか、山なんぞアだんだんに高くなるもんだい、だしぬけに突ッ立ったような山なんてのAねえや」

「ふゥン……だけどなア、この通り道にこんな大きなものオ邪魔ッけだな、これおめえどうしようツてんだい」

「どうしようツて事Aねえや、この山A越すんだよ」(『古典落語』)

例(10)、例(11) (始めから②の対話部分まで) の状況では、話し手が聞き手の視点を自分に同一化・一体化して自己の視点だけを参照した上で、指示詞「A」によってその知覚対象の指示あるいは提示、照応が行われている。このようなA (以下、「A②」と呼ぶ) は、(話し手が聞き手も自分と共通の認識を持つと想定して「われわれ」の場を構成した上で、) 空間的にも心理的にも我々の遠くにあると判断したものを指し示す際の融合型のAと同じ性質のAに他ならない。

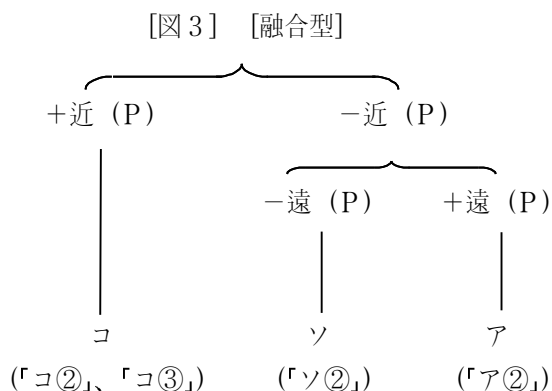
さらにこのA (例(10)、(11)の①) は、例 (10) では「指差し」という指示行為が相伴って用いられているのに對して、例 (11) では「呼び掛け」による催促行為の後にそのようなジェスチャーをも随伴せずに使われる、というその知覚対象の提示の仕方に差が見られる。

が、このような相違にかかわらず、例(10)、(11)の②は、例(10)、(11)の①と同じ知覚対象を照応している。言い換えれば、遠くにある知覚対象を提示している例(10)、(11)の①「A」に對して、例(10)、(11)の②「A」はそれと同じ遠方の知覚対象を照応しているのである。

さて、例 (11) ではその対象を指示する指示詞の轉化過程 (「A」→「コ」) の場面が描かれている。

このような場面は知覚対象の大きさよりは空間的な距離あるいは心理的な距離によって説明されるのが自然であろう。それは話し手と聞き手ともに遠くにある知覚対象の箱根山を見て歩きつつ、はじめは互いにその山をAで直示してから、段々そこに近づいていくにつれてコを用いることになる、という (空間的あるいは心理的な距離による) 場面展開の様相によっているからであると考えられる。以上のように、「融合型」では話し手の空間的・心理的距離によって、コ・ソ・Aが使い分けられている。

以下、「融合型」におけるコ・ソ・アの選擇要因及びその機能領域の特徴に基づいて、コ・ソ・アの意味素性を図示すると、次の通りになるであろう（「P」は「P:Participant（言語伝達の關与者）（S+H）」、Sは「話し手」、Hは「聞き手」を意味する）。



この [図3] の [融合型] では、話し手が聞き手も自分と共通の認識を持つと想定して「われわれ」の場を構成した上で、現場の知覺對象に對して、空間的にも心理的にも我々の近くにあると判断した場合（ [+近 (P)] ）は近称のコ（「コ②」、「コ③」）で、我々の近くにあるとも遠くにあるともつかないものと判断した場合（ [-近∩-遠 (P)] ）は中称のソ（「ソ②」）で、我々の遠くにあると判断した場合（ [+遠 (P)] ）は遠称のア（「ア②」）で指し示す。

### 3.2.2.2 「對立型」

話し手が現實の場面内の聞き手を自分と對立の立場に立つものと認識して場を構成する時の、指示形式を「對立型」と呼ぶ。この「對立型」には、指示對象をめぐって話し手と聞き手とのどちらかが優位を占めて聞き手の視点が積極的に参照される場合もあれば、その對象をめぐって話し手のほうが優位を占めて聞き手の視点が参照される場合もある（後者の場合には、話し手による「指差し」などのような指示行為が付隨するようである）。さらに、（指示對象に對して話し手と聞き手とのどちらかが優位に關わって）聞き手の視点が消極的に参照される場合もありうる。

つまり、「對立型」では、聞き手のなわばりが認められると同時にその領域内に「對称」のソ（「聞き手領域（指示）」のソ）が出現するが、「自立型」「融合型」での中称のソ（「中立・中位・緩衝領域（指示）」のソ）は存続しつつ、「他称」のアも現れる、ということである。

このような点に注意しつつ、「對立型」に屬するコ・ソ・アの例の分析を試みる。まず、

コの場合から考えてみよう。

- (12) 「これは何だ」  
「それは酒だ。——非常に古い紹興酒だと云うのだが、欲しければ一と瓶分け  
てもいい」（『蓼喰う虫』）
- (13) 「これは街にいる一角獣の頭骨だね？」と僕は彼女に訊いてみた。  
彼女は肯いた。「古い夢はその中にしみこんで閉じこめられているの」と彼女は静か  
に言った。（『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』上）
- (14) 彼はむすこの顔をごしごし手で洗った。  
「ちゃん、痛いよ。」  
「何が痛いんだ。」  
「そこ、痛いんだよ。」  
周作は目の下の傷を、手でおさえようとした。（『生きとし生けるもの』）

例(12)、(13)の「これ」が話し手にとって空間的にも心理的にも近いものを指すのに用いられていることは明らかである。しかも、このコは、指示対象の同定可能性（注：指示詞の指示対象が聞き手にとってどれぐらいはっきり同定することが可能かということ）も高いのに加え、指示対象に対して聞き手より話し手のほうが優位に関わっている話し手中心の関係のコと見ることが出来る。つまり聞き手の視点が積極的に参照される「対立型」のコ（以下、「コ④」と呼ぶ）なのである。

これに對して、例（12～14）においての「それ」「その」「そこ」は、話し手にとって空間的にも心理的にも相手の近くにあるもの、即ち聞き手の優位に関わっている対象を指している。つまり聞き手中心の関係のソといえる。そしてこのソも、聞き手の視点が話し手の視点と相對立し、また積極的に参照される「対立型」のソ（「聞き手領域（指示）」のソとも言う。以下、「ソ③」と呼ぶ）なのである。

次に、ソの性格についても分析してみよう。

- (15) （話し手と聞き手とが部屋のなかで立ち話をしている時、話し手が手をうしろへや  
って、つくえをさしながら）  
「そのつくえを、ごらん」（高橋（1956））
- (16) （話し手の背後にある黒板を指さして）  
「そこに書いてある字を讀んでください。」<sup>5)</sup>（森田（1982））

---

5) 例（16）のソに關連して、森田（1991）は次のような例を挙げ、ソの領域を聞き手側の領域としていた通説に反對の立場をとった。これに似たような考えが高橋（1956）（例（15））にも示されている。

（5）（教師が生徒に、自分のすぐ背後の黒板をさして、）

(15)、(16)の例のような場面は特殊な状況の場合とみなされ、さらに仮にそのような場面が一般に認められるとしても、その指示の場には中称のソの出現しづらいものといわれてきた（佐久間の仮説以来）観がある。

が、この二例及びコ・ソ・アの領域についての実験結果（高橋・鈴木（1982）、姜（1997）参照）からもわかるように、意識の場の「対立型」でもその自体のなわばりは微々たるものではあるが、中称のソの存在は確かめられている。

この中称のソは、「聞き手領域指示」のソとは違って、指示対象に対して話し手のほうが優位を占めて聞き手の視点が参照される際用いられるのであると考えられる。（例(15)、(16)は対話形式をとっていないが、ここではその形式を念頭に置いて「対立型」の中称のソ（以下、「ソ④」と呼ぶ）の説明をした。（注5）の例（5）参照）。さらにこの中称のソは、話し手にとって心理的にあまり近くない対象を指すのに用いられるようである。

またこのような中称のソが用いられる場面では、話し手による「指差し」などのような指示行為がよく随伴するらしい。それは、聞き手が中称のソを対称のソ（「聞き手領域指示」のソ）と間違えないようにさせるためであると思われる。

次に、アの性格についても考えてみよう。

- (17) 「ほら、これ私に似合うでしょ」  
 「いや、それよりあれのほうがいいよ。あのショーウィンドーに飾ってあるほうが……」<sup>6)</sup>（森田（1982））
- (18) わたしが賣子に頼むと、  
 「それにするの？」と桂木さんは訊ねた。  
 「君も女の子らしいね。しかしそれよりあっちのが似合いそうだ」  
 彼はケースの下段に並んでいる冷たそうな青味がかかった乳色の石のネックレスを指した。  
 「だってこっちが気に入ったもの」  
 「じゃぼくが買ってやろう」（『挽歌』、例の一部に手を加えた。）

「その字讀めますか。／はい、それは××です。」（p.20）

また、このような現場指示における「ソ→ソ」「ソ←ソ」の場面設定に関わって、森田（1982）では「コ→ソ／ソ→コ」のやりとりのほか、「ソ→ソ」のやりとりも対立型表現としてまれに現れるとし、

(6) のような例をあげてそれについて説明している。

(6) 「そのへやはきれいですか。／はい、そのへやはきれいです。」（p.32）

つまり、「両者が互いに隔たって位置している場合、あるいは別々の領域に位置して會話を交わしている場合に、両者の中間帯、両者から互いに隔たった傍らの対象、両者の背後、どちらかの側により近いやや離れた対象などは、いずれも「ソ→ソ」「ソ←ソ」の現場指示である。」（p.32）、という記述がその説明にあたる。

- 6) 「対立型」は、「向かいあい」ともいわれているものであるが、話し手と聞き手が離れている場合であっても「並びあい」の形をとることがありうると思われる。

例(17)、(18)のような状況（「対立型」の意識の場）でのコ・ソ・アについては、同一文中（または同一の会話）の中で「ソーア」が共存してはならないという説（三上（1955）など）とその共存を認める説（佐久間（1951）、堀口（1990）、正保（1981）など）の両面から研究されてきた。

つまり前者は「対立型」の場ではコ・ソしか出現しないという考えであり、後者はその場でもコ・ソ・ア三者とも現れるという見方である。そして森田（1982）は一つの文中に「対立型」から「融合型」へと意識の場の轉換が瞬時になされることは自然であるとして、前者の見解に同調しつつその欠点を補完している反面、正保（1981）ではそのような瞬間的な意識の場の轉換は不自然であるとみて、「対立型」でのコ・ソ・ア三者の共存を主張している。

ここでは後者の説に依りながらも、これとは違った観点から「他称」のアの性格について分析してみる。つまり例(17)、(18)のような（指示対象に対して話し手と聞き手とのどちらかが優位に關わって）聞き手の視点が消極的に参照される際の場合においてである。

下記の（19）の例を、そういった面から取り上げてみよう。

- (19) （杏子と杏子にプロポーズした高校時代の同級生小杉が喫茶店に入ると、柊二と柊二をスカウトしようとする女性が奥の席に座っている。若い男性と店に入ってきた杏子に気付いた柊二は、杏子がトイレに立ったのを見計らって近づく。）

杏子： わっ。

柊二： デート？

杏子： どいてよ。

柊二： ね、あそこに座っている男がこの前話したあの男なの？<sup>7)</sup>（『戀するふたりの「感情ことば」』、pp.160～161に手を加えた。）

例（19）は「対立型」の場が成り立つ場面の例とみても大きな差し支えはないといえる。つまり、それは杏子が相手の柊二に通路を塞がれて腹を立てていることから判断できるようなのである。このような例（19）では、話し手（柊二）が聞き手（杏子）の視点を消極的に参照する際の他称のア（以下、「ア③」と呼ぶ）がその姿を現している。さらに、例（19）のアは話し手が自分と相手にとって空間的にも心理的にも近くないものを指すために用いられている。

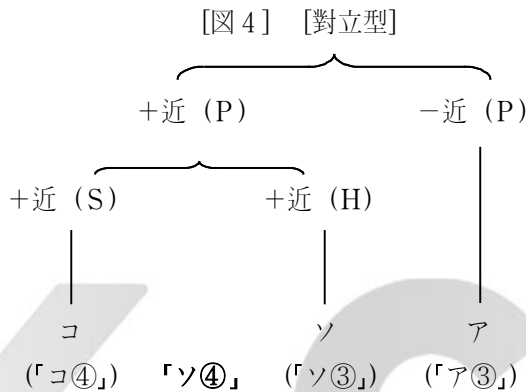
以上のように「対立型」では、話し手の空間的・心理的距離によって、（自称・対称・他称の）コ・ソ・アが使い分けられている。

7) 対立型のアの例として、次のようなものをも参考にされたい。

(7) A: わるいけど、[それ]を [あそこ]に運んでくれる。

B: [これ]でいい? (山梨(1992)、p.4)

以下、「対立型」におけるコ・ソ・アの選択要因及びその機能領域の特徴に基づいて、コ・ソ・アの意味素性を図示すると、次の通りになるであろう（「ソ④」はその他のものとは違ってやや特殊なものと考えられるので、括弧の外側に置いて太字で示している。さらに「ソ④」は「コ④」と「ソ③」との中間に現れることもありうるので、それらの間に示しておく。また吉本（1992、p.111）の「會話空間の外の事物はアで指示される」という記述も下図の理解に参考になると思う。）



この [図4] の [対立型] では、話し手が現実の場面における聞き手を自分と対立するものと認識して場を構成した上で、現場の知覚対象に對して、自分にとって空間的にも心理的にも近いものと判断した場合（ $[+近 (P) \cap +近 (S)]$ ）は自称の「コ」（「コ④」）を、相手の近くにあるものの場合（ $[+近 (P) \cap +近 (H)]$ ）は對称のソ（「ソ③」）を用いるのに對し、自分にとって心理的にあまり近くないものの場合（ $[+近 (P)]$ ）あるいは  $[+近 (P) \cap (+近 (S) \cup +近 (H))]$  は中称のソ（「ソ④」）を使う。そして、他称のア（「ア③」）は話し手が自分と相手にとって空間的にも心理的にも近くないものを指し示す場合（ $[-近 (P)]$ ）に使われる。

一応ここで、「自立型」「融合型」「対立型」におけるコ・ソ・アの基本的な意味素性及びその機能領域の特徴についてまとめておく。

まず、その意味素性の特徴を遠近概念から表すと、次のようになる。

- 1) 自立型では「コ①」は  $[+近 (S)]$ 、「ソ①」は  $[-近 \cap -遠 (S)]$ 、「ア①」は  $[+遠 (S)]$  で表せる。
- 2) 融合型では「コ②」「コ③」は  $[+近 (P)]$ 、「ソ②」は  $[-近 \cap -遠 (P)]$ 、「ア②」は  $[+遠 (P)]$  で表せる。
- 3) 対立型では「コ④」は  $[+近 (P) \cap +近 (S)]$ 、「ソ③」は  $[+近 (P) \cap +近 (H)]$ 、

「ソ④」は [±近 (P) ] あるいは [ +近 (P) ∩ ( +近 (S) ∪ +近 (H) ) ]、「ア③」は [ -近 (P) ] で表せる。

さらにその機能領域の特徴について整理すると、次のようになる（視点によるコ・ソ・アの相互関係については、上記の内容を参照されたい）。

まず、「コ①」「コ②」「コ③」「コ④」ともに一貫して話し手が強く関わっている指示対象を指し示しており、この四つのコはその根底において連続している。

そして「聞き手領域」のソである「ソ③」に対して、「中立領域」のソである「ソ①」「ソ②」「ソ④」はすべて中称という共通した概念の下で連続した関係を結んでいる。

また、「ア①」「ア②」が遠称という概念下でつながっているのに對して、「ア③」（他称のア）のみはそこから外れている。

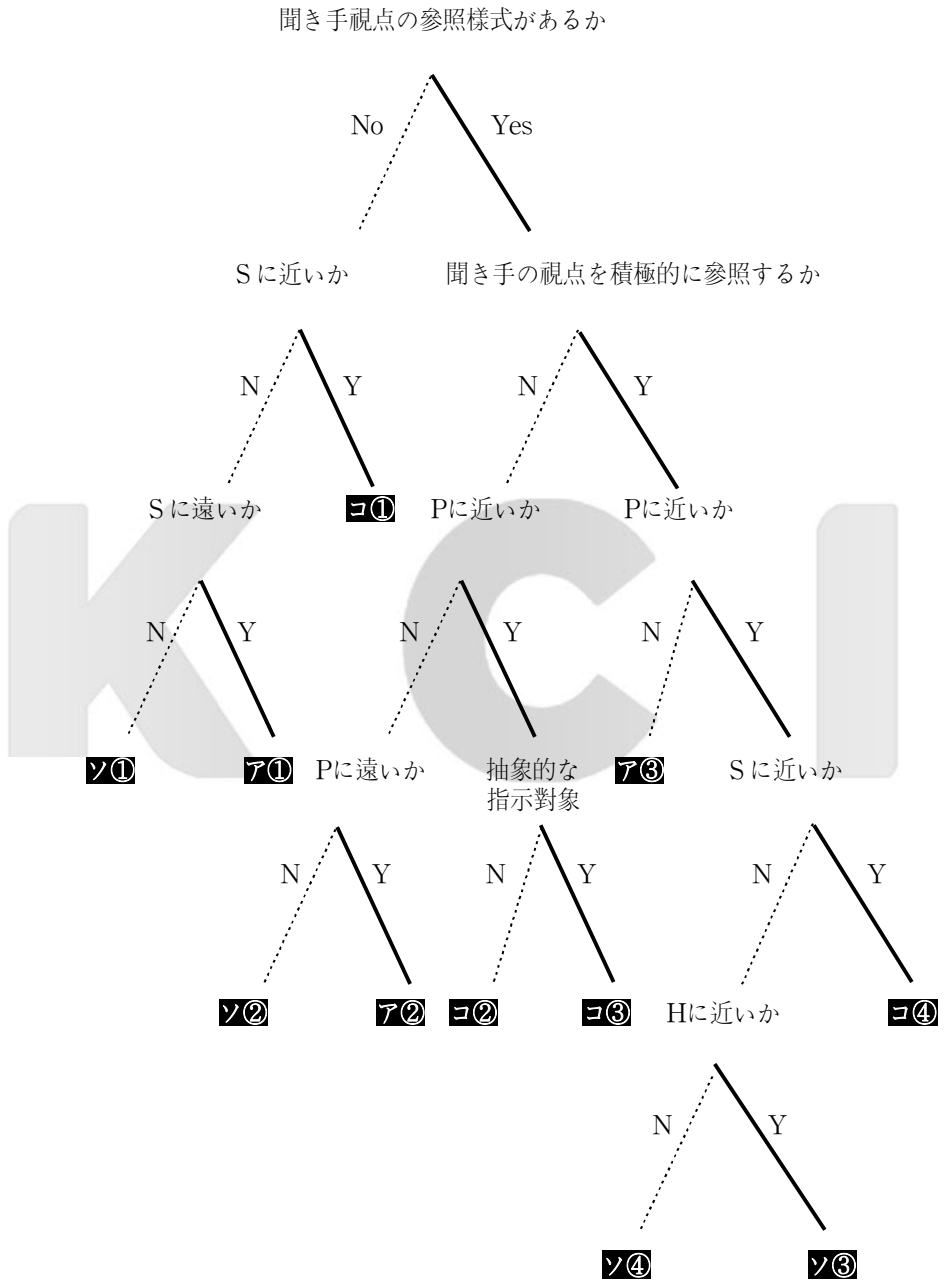
## 4. おわりに

ここでは、現場指示のコ・ソ・アの基本的な意味素性及びその機能領域の特徴について、種々の指示形式を通して究明してみた。その結果、「自立型」「融合型」「對立型」においてのコ・ソ・アの基本的な意味素性の特徴は、以下の [図5] のように表せる（コ・ソ・アの機能領域の特徴については本論参照）。すなわち、[図5] は（日本語母語話者の）認知主体が知覺的視点を通して、外部世界における対象そのものをどう把握するかによって、コ・ソ・アのいずれが選擇されるかが決まってくる、現場指示におけるその選擇条件の関係を階層化して表したものである。

以上のことを含めて現場指示の各指示形式におけるコ・ソ・アの選擇要因をまとめてみると、①「指示対象に對する聞き手の視点の捉え方」（「融合型・對立型」）、②「指示対象をめぐる話し手と聞き手の相對的な位置関係」（「融合型・對立型」）、③「指示対象に對する空間的または心理的な距離」（「自立型・融合型・對立型」）、④「指示対象の大きさ」（「自立型」）、⑤「ジェスチャー（gesture）の隨伴の必要如何」（「融合型・對立型」）、⑥「知覺対象の種類」（「自立型・融合型・對立型」）などのようなものになると考えられる。この中、その選擇に際して、①、③が決定的な要因になるようである。



[図5] 自立・融合・対立型におけるコ・ソ・アの基本的な意味素性図



## 【参考文献】

- ・大槻文彦(1890)『語法指南』(1996年、勉誠社より復刊)
- ・龜井孝・河野六郎・千野榮一編(1996)『言語學大辭典術語編』(第6卷),三省堂, pp.630~631
- ・川端善明(1993)「指示語」『國文學 解釋と教材の研究』38-12, 學燈社
- ・姜鎮文(1997)「日韓兩國語の指示語の對照研究」『立正大學國語國文』34
- ・金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の關係について」『自然言語處理』6-4, 言語處理學會, pp.67~91
- ・小泉保(1990)『言外の言語學—日本語語用論—』, 三省堂
- ・阪田雪子(1971)「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外國語大學論集』21 pp.125~138
- ・佐久間鼎(1951)『現代日本語の表現と語法(改訂版)』厚生閣
- ・正保勇(1981)「コソアの体系」『日本語の指示詞』(日本語教育指導參考書8), 國立國語研究所大藏省印刷局 pp.51~122
- ・宋晚翼(1989)「指示詞『コ・ソ・ア』の用法についてプロトタイプ論的な見方からの試案」『廣島大學大学院教育學研究科博士課程論文集』15
- ・高橋太郎・鈴木美都代(1982)「コ・ソ・アの指示領域について」『國立國語研究所報告 71 研究報告集3』, 秀英出版
- ・田中春美・他編(1988)『現代言語學辭典』, 成美堂, pp.156~157
- ・西出和彦(1993)「空間の言語學」『月間 言語』22-8, 大修館書店
- ・堀口和吉(1990)「指示詞 コ・ソ・アの表現」『日本語學』9-3, 明治書院 pp.59~70
- ・三上章(1955)『現代語法新説』, 刀江書院(1972くろしお出版より復刊)
- ・三上章(1970)「コソアド抄」『文法小論集』, くろしお出版
- ・森田良行(1982)「指示語の扱い方」『講座日本語教育』18, 早稻田大學語學教育研究所, p.32
- ・森田良行(1991)「代名詞はどう教えるか」『語彙とその意味』(NAFL選書11),アルク(株), p.20
- ・山梨正明(1992)『推論と照応』, くろしお出版, p.4
- ・吉田朋彦(1993)「日本語指示詞の直示用法の使用條件」『東京大學言語學論集』13, pp.342~343
- ・吉本啓(1992)「日本語の指示詞コソアの体系」(Yoshimoto,Kei(1986)の日本語版) 金水・田窪(編)(1992)所收, p.111
- ・Lyons, John.(1977) Semantics I II. Cambridge : Cambridge University Press, p.637

## 【資料一覽】

遠藤周作『海と毒藥』、1960／川端康成『千羽鶴』、1955／谷崎潤一郎『蓼喰う虫』、1951／永井荷風『墨東綺譚』、1951／夏目漱石『三四郎』、1948／夏目漱石『坊っちゃん』、1955／原田康子『挽歌』、1961／三島由紀夫『金閣寺』、1960／村上春樹『世界の終りとハードボイル

ド・ワンダーランド』上、1988／山本有三『女の一生』上、1951／山本有三『生きとし生けるもの』、

1955（以上、新潮文庫、新潮社より）

柳家小さん『古典落語 小さん集』（ちくま文庫、筑摩書房、1990）

泉子・K・メイナード『戀するふたりの「感情ことば」』（くろしお出版、2001）

K C I

## 要 旨

本稿は、現場指示のコ・ソ・アの基本的な意味素性及びその機能領域の特徴について、種々の指示形式(「自立型」「融合型」「對立型」)を通して究明してみた。以下、それらの特徴をそれぞれ取り上げてみることにする。

- (1)・自立型では「コ①」は [+近 (S)]、「ソ①」は [-近∩-遠 (S)]、「ア①」は [+遠 (S)] で表せる。
  - ・融合型では「コ②」「コ③」は [+近 (P)]、「ソ②」は [-近∩-遠 (P)]、「ア②」は [+遠 (P)] で表せる。
  - ・對立型では「コ④」は [+近 (P) ∩+近 (S)]、「ソ③」は [+近 (P) ∩+近 (H)]、「ソ④」は [±近 (P)] あるいは [+近 (P) ∩ (+近 (S) ∪+近 (H))]、「ア③」は [-近 (P)] で表せる。
- (2)・「コ①」「コ②」「コ③」「コ④」ともに一貫して話し手が強く関わっている指示対象を指し示しており、この四つのコはその根底において連続している。
  - ・「聞き手領域」のソである「ソ③」に對して、「中立領域」のソである「ソ①」「ソ②」「ソ④」はすべて中称という共通した概念の下で連続した関係を結んでいる。
  - ・「ア①」「ア②」が遠称という概念下でつながっているのに對して、「ア③」(他称のア)のみはそこから外れている。

さらに、以上のことを含めて現場指示の各指示形式におけるコ・ソ・アの選擇要因をまとめてみると、①「指示対象に對する聞き手の視点の捉え方」(「融合型・對立型」)、②「指示対象をめぐる話し手と聞き手の相対的な位置關係」(「融合型・對立型」)、③「指示対象に對する空間的または心理的な距離」(「自立型・融合型・對立型」)、④「指示対象の大きさ」(「自立型」)、⑤「ジェスチャー (gesture) の隨伴の必要如何」(「融合型・對立型」)、⑥「知覺対象の種類」(「自立型・融合型・對立型」) などのようなものになると考えられる。この中、その選擇に際して、①、③が決定的な要因になるようである。

キーワード：自立型・依存型・融合型・對立型・視点・直示(deixis)  
意味素性・機能領域

투 고 : 2004. 11. 30  
1차 심사 : 2004. 12. 11  
2차 심사 : 2005. 1. 4

住 所 : (302-762) 대전광역시 서구 탄방동 한가람아파트 9동1205호

電 話 : (042) 482-2521

e-mail : wonil-kim@hanmail.net